

◆ 平成26年度活動報告シート ◆

団体名：NPO法人 荒川流域ネットワーク

代表者：代表 鈴木 勝行

URL : [http:// arariver.seesaa.net/](http://arariver.seesaa.net/)

1. 活動が必要とされた状況

H18年から東京湾から溯上してくる稚アユの数が激増したが、入間川水系の各河川では大きく落差が発生した取水堰が多く、アユが成長する清流域まで溯上を阻んでいる状況が続いていた。そこで、入間川水系での溯上環境を改善するため、関係機関に情報提供し、世論を喚起するための調査活動を開始し、貴財団の支援を受け5年間活動を続けてきた。残されていた高麗川、都幾川、槻川の上流部の溯上環境の調査と県が設置した入間川の魚道の溯上状況の調査が、今後の活動のために必要であった。

2. 活動の内容（実施時期、参加人数、活動内容など）

4月29日に高麗川と都幾川で、合計67名の人々が参加して、稚アユのアブラビレを切除する標識作業を行い、高麗川に3,717尾、都幾川に4,370尾の標識アユを放流した。槻川には昨年と同様約2kg(1,300尾)を放流した。

入間川には、5月25日に34名が参加して標識作業を行い、2,066尾を放流した。直後に特別採捕の許可を得て調査を行なおうと準備を進めたが、許可が下りず断念した。

高麗川は、最上流部の南川合流点まで、7月13日から10月2日の間、13回の調査を行い、都幾川では大野大堰まで、7月4日から10月4日の間、6回の調査を行なった。

槻川では、落合橋まで7月4日から9月18日の間、8回の調査を行なった。また、入間川では、上奥富堰まで5月26日から10月27日の間、18回の調査を行った。8月30日には37名で地曳き網による調査も行った。



入間川での標識作業（5月25日）



入間川での地曳網での調査（8月30日）

3. 活動の成果

1. 高麗川での調査では、西武鉄橋下の落差を越えて、南川との合流点まで溯上したことを確認した。都幾川では、一部は三波溪谷の下流に分散し、多くは関根大堰まで溯上したことが分かった。同堰が大きな溯上障害物になっていることが確認された。槻川では、万田堰がやはり溯上障害物になっていることが分かった。入間川では、寺山堰の魚道を溯上したことが確認できたが、浅間堰での溯上状況については、確認できなかった。
2. 流域再生シンポジウムでの発表等を通して入間川・越辺川水系の流域の多くの人たちにアユの溯上環境について知ってもらうことができた。
3. 私たちの調査を受けて埼玉県も「川のまるごと再生」事業の中で、入間川での自然溯上のアユの復活を目指し、8ヶ所の横断構造物に対する魚道設置事業が現在進行中である。

4. 今後に残された課題

入間以外の河川については、今後調査データをもとに県と国の機関に溯上環境の改善を求める活動する必要がある。また、入間川については、現在進められている県による魚道設置事業の効果検証を県と協力して進めて行く必要がある。